

織豊期城下町にみる町割プランの変容

— タテ町型からヨコ町型への変化について —

中西和子

I. はじめに

- (1) 既往の城下町研究の展望
- (2) 町割プラン研究における問題の所在
- (3) 本稿の目的および構成

II. 秀吉の城下町にみる町割プラン

- (1) 長浜城下町
- (2) 天正期大坂城下町
- (3) 伏見城下町
- (4) 慶長期大坂城下町
- (5) 小結

III. 秀吉系城下町におけるタテ町型の志向

- (1) 長浜建設から関ヶ原合戦まで
- (2) 関ヶ原合戦以後～元和偃武まで
- (3) 小結—秀吉系大名にとっての関ヶ原合戦と城下町

IV. 徳川系城下町におけるヨコ町型への変化

- (1) 関東移封から関ヶ原合戦まで
- (2) 関ヶ原合戦以後～元和偃武まで
- (3) 小結—徳川系大名にとっての関ヶ原合戦と城下町

V. おわりに—秀吉および秀吉系の城下町と徳川系城下町の比較

- (1) 町割プランと街道
- (2) 町名にみる内部構造
- (3) まとめと今後の課題

I. はじめに

- (1) 既往の城下町研究の展望
近世城下町の空間構造の解明をめざした研

究は、歴史地理学にとってのみならず、学際的な一大テーマとなっている。

なかでも、領主の都市計画に基づく平面的・空間的形態研究は、小野均を嚆矢として、城下町研究の基本となった¹⁾。歴史地理学では藤田元春が「都市のプラン」という語を用いて、古代の条里制と城下町のプランの関連について論じた²⁾。1958年に矢守一彦が「都市プラン」および「城下町プラン」の語を用いて、城下囲郭のあり方に注目し、そのプランを戦国期型・総郭型・内町外町型・郭内専士型・開放型の五つに類型化した³⁾。

さらに小野・矢守の論を踏まえた上で、町屋の形態と藩の規模に注目することで城下町を類型化したのは松本豊寿である⁴⁾。町屋の形態を団塊状・街村状・両者の結合状に三区分し、それに藩の規模を小藩(陣屋クラス)・中藩ならびに大藩・大藩(特に雄藩クラス)の三区分を対応させた。

文献史学の小島道裕は、従来イエの支配の対象であった給人および直属商工業者と市場商人の居住区が、城下町の町屋地区として空間的に一元化することを明らかにした⁵⁾。

さらに前川要は考古学の成果から、長方形街区と短冊型地割をセットにした区画の展開を指標に、織豊系城下町の成立過程を5段階に類型化した⁶⁾。

建築史学では、宮本雅明は城下町を捉えるに際し、「ヴィスタ(見とおし)論」で、城下町における公権力を象徴する景観演出に注目

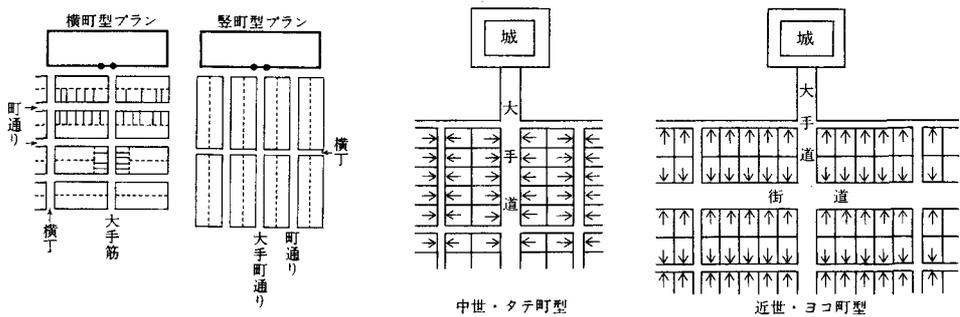
した⁷⁾。さらに都市史研究会が結成され⁸⁾、吉田伸之によって原城下町・(真正)城下町・複合城下町・巨大都市という城下町の展開序列が示され⁹⁾、玉井哲雄は城下町建設に際し、住民サイドの都市建設手法が領主による町割プランにとりこまれることを指摘した¹⁰⁾。

以上の成果を見ると、町屋地区における町割プランの分析は城下町の空間構造を理解する上で重要であることがわかる。それによってもたらされる景観が、城下町の建設主体である封建領主の意図および藩政構造の反映であるならば、小林健太郎の指摘するとおり「過去の景観がどのように機能していたかを考える場合、その時代の社会的・経済的状況や、さらには政治的・文化的状況、すなわち

歴史的背景を無視することはできない¹¹⁾」ことは明白である。しかし、既往の研究では、モデル化・単独城下町研究の蓄積はあるが、「景観の復元および地理学的手法による分析・考察に偏っている。歴史的変遷ないし発展過程への関心が低い¹²⁾」という批判に答えられないでいることも今日における歴史地理学研究の現実でもある。

(2) 町割プラン研究における問題の所在

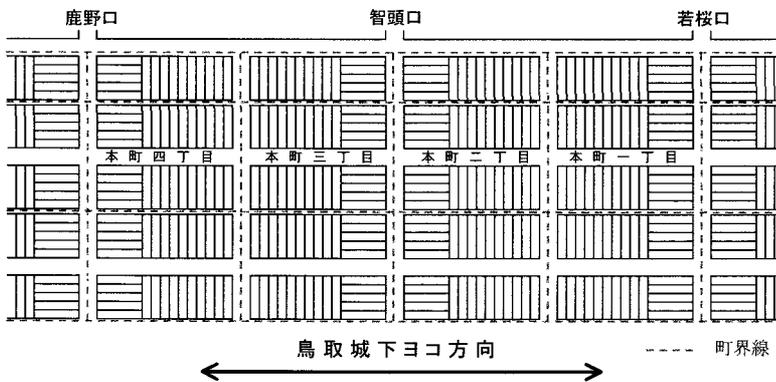
歴史地理学における城下町の町割プラン研究で、図1にみるように、矢守は城下における街道の引き込みパターンと、主要な町のブロックが城郭に対していずれの向きに配列されているかに注目し、**縦町型プラン**と**横町型**



① 矢守による町割モデル

② 足利による町割モデル

城郭・武家地



③ 鳥取における宅地割模式図

図1 町割プランの定義と鳥取城下町の宅地割モデル
①矢守(1988), ②足利(2000)より ③中林(1981)をもとに作成。

プランに分類した¹³⁾。足利は主要街区が大手を中心とタテ町を形成する、街道を中心としてヨコ町を形成するという基準にたつてタテ町型城下とヨコ町型城下に分類した¹⁴⁾。

しかし、実際の鳥取城下（部分）の町割と宅地割¹⁵⁾のモデルと比較すると、有効なモデルであるとはいえない。矢守の分類方式では、町のブロック割でみると横町型プランに相当するが、宅地割も考慮すると三つの口からの街路（特に智頭街道は大手であると同時に町界線の機能を有する）に間口が開いており、横町型プランとしては分類不能になる。

さらに足利の分類基準では、間口が大手通に開いている点ではタテ町型に分類されかねないと同時に、街道に間口が開いているという点ではヨコ町型に分類されるという不整合をきたしている。以上より、町割のモデルに関しては見直しの必要があることがわかる。

次に、織豊期から近世にかけての町割の基本がタテからヨコへシフトするという点では、両氏の見解は一致している。しかし、その画期については、足利は「秀吉による伏見建設；文禄3（1594年）」を唱え、それを「日本の城下町建設史上の大転回」と評価し、全国をつないだ主要街道に主要街区が設定されるヨコ町型がその後の主流になると論じた¹⁶⁾。

それに対し矢守は、さらに時代を遡って「秀吉による長浜建設；天正2（1574年）」を提唱し、城下町の建設に際して街道が大手前を横切るように繰込み、それを契機に大手に対し横ブロック・横方向の町通りを普及させたことが秀吉の果たした役割であったと評価し、その後の秀吉系大名の城下では大手に対し横ブロック型の街区を中心とした横町型の城下が全国に展開すると述べた¹⁷⁾。

しかし、この問題に関しては、後の秀吉系大名の城下町における展開も含めて、両氏の逝去により議論は中断されたままである。

この2つの説に対し、宮本は慶長5（1600）年の関ヶ原合戦を画期として横町型に主流が移ることを述べた¹⁸⁾。城域に向かう街路から、公権力の象徴（天守¹⁹⁾）を見とおせるように設置することが、公権力の存在を住民に知らしめる手段であり、公権力形成の初期段階にあたる織豊期には不可欠であり、ヴィスタを得やすい縦町型のプランこそこの時代性を反映すると論じた。そして安定した公権力が確立した後は、経済原理を優先した横町型が主流になると述べる。

また、ここで戦国期城下町の景観をよくあらわすことで知られる「村上要害」²⁰⁾と矢守による城下町の5類型を対応させて考えると（図2）、織豊期以前に主流であった山城とその下の町屋の位置関係はヨコ方向をとるのが従来の姿であることから従来説の再検討が必要であることがわかる。

しかしながら、町割がタテ・ヨコいずれをとるかという問題は、都市の本質にせまるテーマを内包し、中島義一によれば単に城下町のみならず各種の都市においても援用可能であるとされ²¹⁾、「たかがタテ・ヨコのおはなし」²²⁾などではなく、歴史地理学の問題として重要であることは明白である²³⁾。

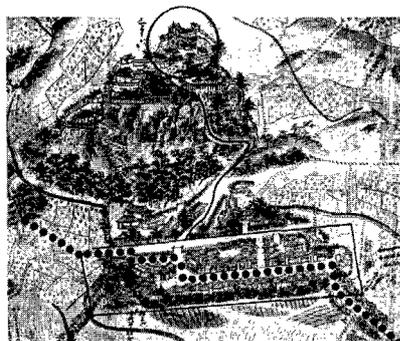


図2 戦国期城下町にみる町割
左：「越後国郡絵図」(部分)に一部加筆，右：矢守(1988)より。

(3) 本稿の目的および構成

本稿の目的は、上述のような既往の研究に対する検討を踏まえて、従来の歴史地理学に欠けていた視点、つまり、対応する時代の政治的情勢を考慮に入れつつフィジカルな城下町プランの変容過程を分析すべきであるとの観点から、町割プランにおけるタテからヨコへの変化の画期について、全国レベルで改易・転封が行われ城下町建設ラッシュの契機となった関ヶ原合戦が町割プランに及ぼした影響について、城下町経営にみる政略的・戦略的側面から考察することにある。

また、筆者は、秀吉の城下町の全体プランの特色は城郭と中世来の先行基盤である寺社との結合にあり、その結果、タテ町型を基本とするプランが派生し、それはかつて秀吉系大名であった藤堂高虎にも継承されることを指摘した²⁴⁾。本稿では、町割プランのレベルで秀吉・秀吉系大名の城下町を再検討し、それらに共通する部分を明らかにしたい。

そこでまず第二章では、秀吉が居城とした城下町の町割プランを時系列的に検証し、その再評価を行う。第三章では、秀吉系大名の城下に注目し、関ヶ原合戦までの事例と、関ヶ原合戦から豊臣家滅亡（元和偃武）までの事例を検証して、秀吉系大名にとっての関ヶ原合戦の意義を考察する。それと比較する意味で第四章では、徳川系大名の城下について考察する。以上の考察結果をもとに第五章では、豊臣政権・徳川政権の領国知行形態の相違が城下町の町割プランにどう影響したかを論じ、これらの分析からタテ町型城下町とヨコ町型城下町のそれぞれの本質を考えたい。

なお、タテ町・ヨコ町に関する定義の混乱が研究の伸展を妨げている面も否定できないので²⁵⁾、本稿では、街路によって区切られたブロック²⁶⁾の形態ではなく、町界線によって区切られた個別町²⁷⁾の形態に注目し、城郭（武家地含む）に対してタテ（垂直）方向の町通りを中心にした町をタテ町、同じくヨコ（水平）方向の町通りを中心にした町をヨコ町と定義する。また、必ずしも城下町全体が単軸のプランで構成されるのではないことに鑑み、タテ町で主要な町²⁸⁾が構成される町割プランを持つ城下町をタテ町型、対してヨコ町で主要な町が構成されるものをヨコ町型と定義して（図3）、以下、論を進めていく。

II. 秀吉の城下町にみる町割プラン

(1) 長浜城下町

秀吉は天正元(1573)年に浅井氏の旧領である湖北三郡12万石を一円知行することとなり、領国経営の中心に長浜を選定し、翌天正2年春から、城下町を建設する²⁹⁾。

当時の長浜城下町の町割プラン（図4）をみると、城下町建設以前はその東方を通っていたとされる北国街道が、大手前を横断する方式で城下に引き込まれていることがわかる。

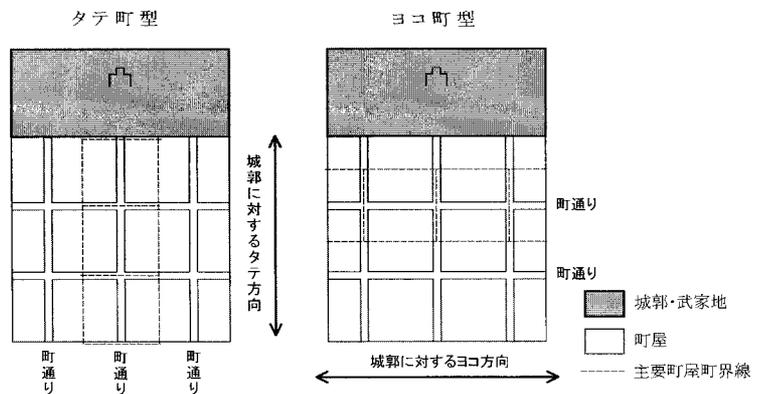


図3 本稿における町割プランの定義

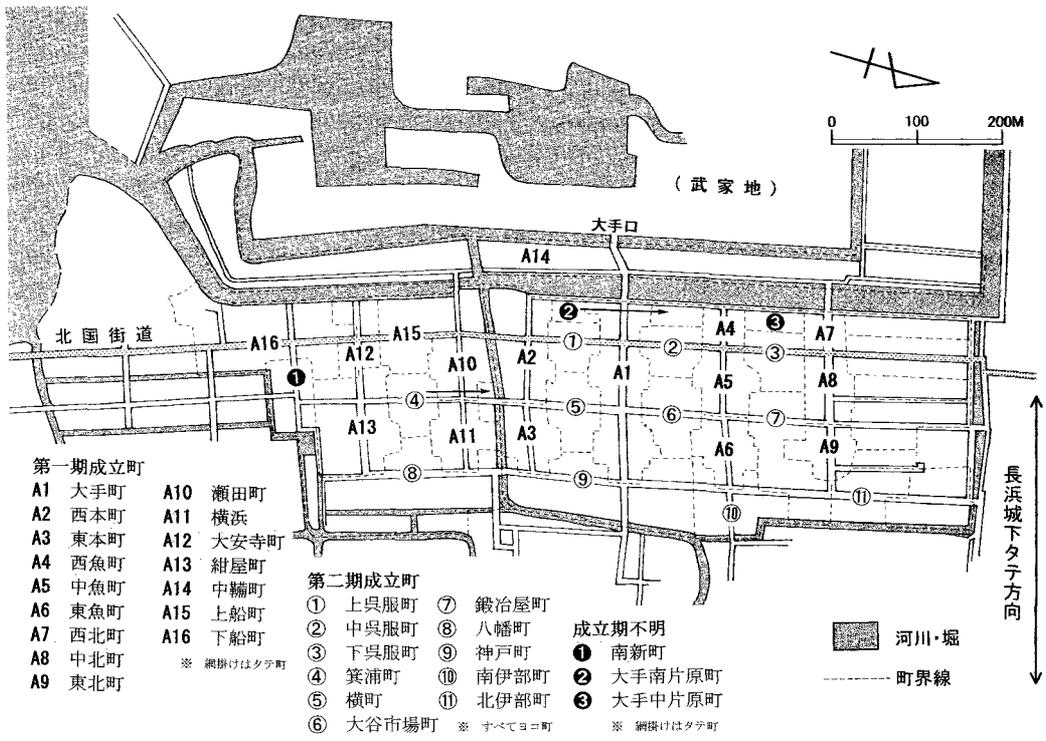


図4 長浜城下町における町割

「長浜町大絵図案」(市立長浜歴史博物館『湖北の絵図-長浜町絵図の世界』, 1987, 所収)をもとに作成。
町界は『明治7年地券取調総絵図』による。

秀吉時代の長浜の城下内部は、大きく分けて、第一期(1574-76)に近隣の町を吸収して建設された部分と、第二・三期(1577-81)にかけて小谷城下から移転してきた部分の大きく二つに分類できる³⁰⁾。第一期に町割されたのは16町で大手町・(西・東)本町・(西・中・東)魚町・(西・中・東)北町・瀬田町・横浜町・大安寺町・紺屋町・中鞆町は、東西路を中心としたタテ町を形成した。また、(上・下)船町は現在の形態からは北国街道中心のヨコ町のようにみえるが、近世末の下船町の町絵図では、北国街道上と東西路上に町名が表記されている事実からも、東西路が本来の中心であった可能性が残る³¹⁾。

対照的に、第二期以後小谷から移転してきた町は、すべてが北国街道およびそれに並行する南北路を中心としたヨコ町を形成する。

なお、成立時期が不明である南新町は、南の新町と解せる名称から成立が遅いと推測されるが、紺屋町・下船町に隣接しかつ地子免地であるため第一期に成立した可能性も残る。

以上により、建設初期段階の長浜は完全なタテ町型であり、確かに、「街道を大手前ないしはそれに近い部位に〈横付け〉する」³²⁾事例ではあるが、この時期、北国街道は主要町通りでないばかりか、街道沿いに「町」が存在しない部分があった。つまり、町割プランナーとしての秀吉には、横軸である北国街道ではなく、城から出る大手を中心に大手町、およびそれに並行する複数の街路を中心に町をつくるという縦軸重視の姿勢がみえる。

(2) 天正期大坂城下町

天正11(1583)年、賤ヶ岳合戦の勝利で名実

ともに信長の後継者となった秀吉は、石山本願寺の旧寺地に大坂城を築く。

この時期の大坂城下町の開発は、上町台地上が中心であり³³⁾、中でも谷町筋以东の上町・

玉造一带と南の平野町一带が中心であったと推測される³⁴⁾(図5)。上町一带は、同時期の絵図が確認されておらず、なお後に三の丸建設によって町屋が移転させられるため、正

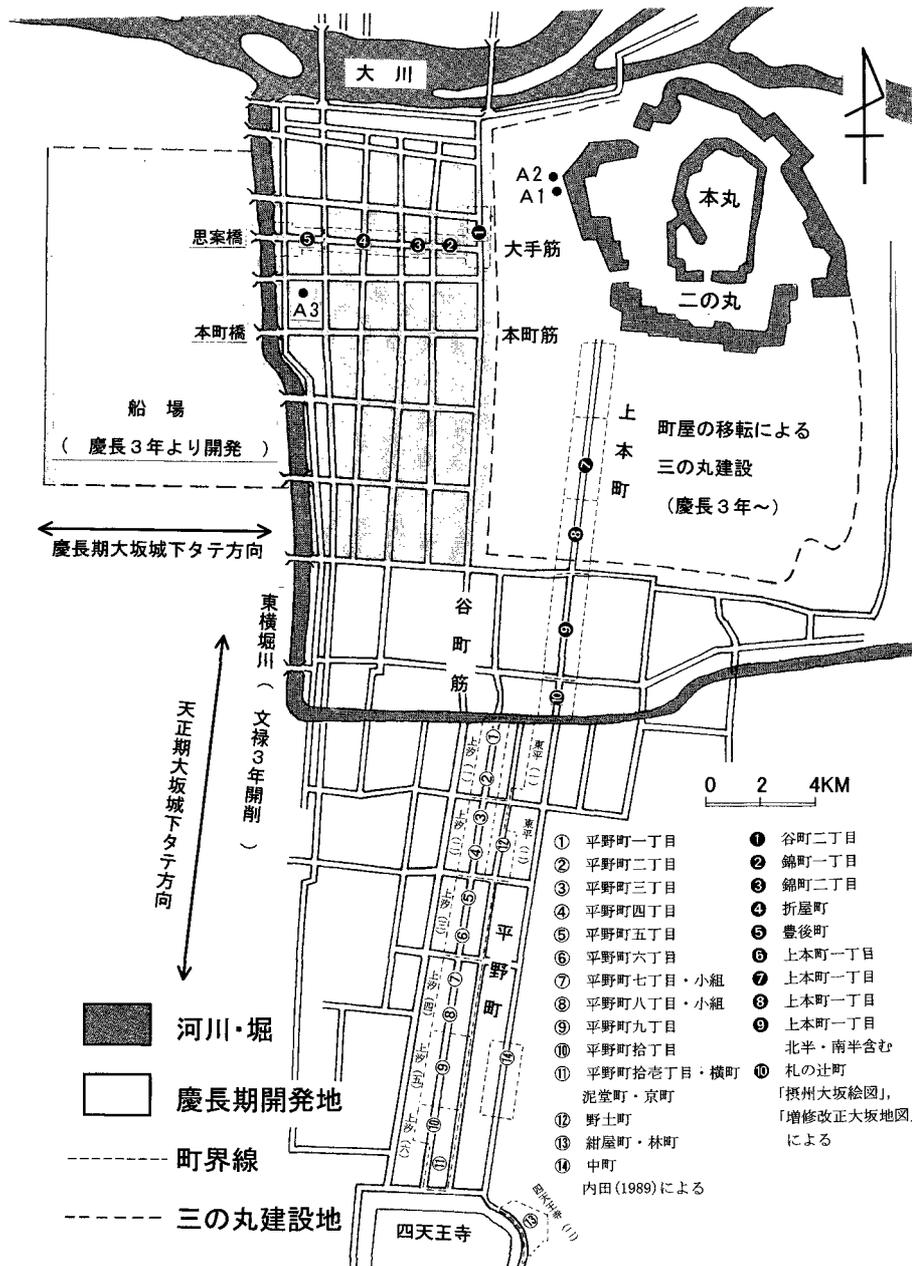


図5 大坂城下町における町割
城下の復元は内田(1989)による。町界は現在のもの。

確な当時の町割は不明ではあるが、『増修改正大阪地図』³⁵⁾にみられる上本町筋³⁶⁾を中心とする町名の表記と、矢内昭による近世末大坂の町割復元³⁷⁾をあわせて町割を推定すると、城郭に近い部分から上本町一丁目・同二丁目・同三丁目・同四丁目北半・同四丁目南半・札の辻町と、タテ町を構成する。なお、それより南の部分でも、一筋西（本平野町筋）と二筋西（塩屋町筋）の通りを中心に一丁目から十一丁目まで続く平野町もタテ町であることが明らかにされている³⁸⁾。

加えて平野町は城下建設開始後3ヶ月ですでに町屋の建築物が完成していることも考慮すると、上本町ー平野町と続くラインが主要な町屋と判断できる。以上により、天正期大坂も長浜と同じくタテ町型に分類可能である。

(3) 伏見城下町

天正19(1591)年8月に秀吉は実子鶴松を失い、12月に甥の秀次を後継者として関白職と聚楽第を譲ると、翌年、伏見指月の岡に隠居所を建設する。しかし、翌文禄(1593)2年、実子お拾いが生まれると、秀吉は大城郭に改変すべく天下普請を命じ、同年末から城下の町割も始まる³⁹⁾。同時に、足利が天下人たる「秀吉の伏見経営構想」⁴⁰⁾と評した、巨椋池周域まで広がる大規模土木工事を含む新しい横町型城下の建設が始まるとされている。

ここでは町割プランの検討に入る前に、この時期の豊臣政権内部の緊張状態について考えたい。対外出兵に批判的であったといわれる一門および家臣達の存在はもとより、結果的に早すぎた後継者指名によって生じた秀吉と現関白の秀次との間の緊張は多くの先学によって指摘されている⁴¹⁾。また、一門を統括し、かつ秀吉が最も信頼をよせていたであろう実弟の秀長はすでにこの世になく、秀保の代になった大和豊臣家はもはや、必ずしも信頼できる存在ではないことも重要である

う⁴²⁾。このような背景もふまえたうえで考えると、宇治橋の撤去、築堤・豊後橋の新設という一連の土木事業の結果、「秀吉は伏見城下というお膝許で、山城盆地の南北交通路をほぼ完全に管掌することになった」⁴³⁾との指摘は、伏見城下町の立地には京（聚楽第）と大和（郡山城）の連携を分断する戦略的意図があるという、従来とは異なる解釈を可能にする。

ところで、伏見城下町は現在の大手筋と京町通りの位置関係から、ヨコ町型の典型的事例のように評価されてきたが、町割がなされた時点においては、城郭（伏見指月城）は木幡山山上ではなくさらに南の宇治川に近い地点に位置していた。この城は、文禄5(1596)年7月13日の地震で倒壊し、同15日より、地盤の安定した丘上で新しい城（伏見木幡城）の建設が開始されたが、当初の城下の町立てから2年近く経過しているため、この時点では町の建設はかなり進んでいたと考えられる。そのため、現在の大手筋は移転した新城郭と先行する城下町とを整合させるために後に設定されたと考えるのが自然であろう⁴⁴⁾。

そのうえで、伏見湊の重要性も念頭において、伏見指月城および湊に近接する一帯の町割プランに注目すると(図6)、京町通以西の伏見湊へ続く町屋地区は、現大手筋と並行する一筋南側の東西路（立売筋⁴⁵⁾ー油掛通)を中心に、大坂町・上油掛町・中油掛町・下油掛町とタテ町が配列されている。さらに街道である京町通より東に「札の辻」の伝承を持つ地点があることにより⁴⁶⁾、この東西路が大手として機能し続けた可能性も考えられる。

また、京町一丁目～四丁目・京町大黒町・大坂町・上油掛町・中油掛町・下油掛町・塩屋町・車町・南浜町・帯刀町・本撞木町・材木町・京橋町の16町が南組の本町組を構成し、伏見における初期に成立した根幹の町として繁栄中心を形成していたことが知られている。なお、大坂町から南浜町の8町はいず

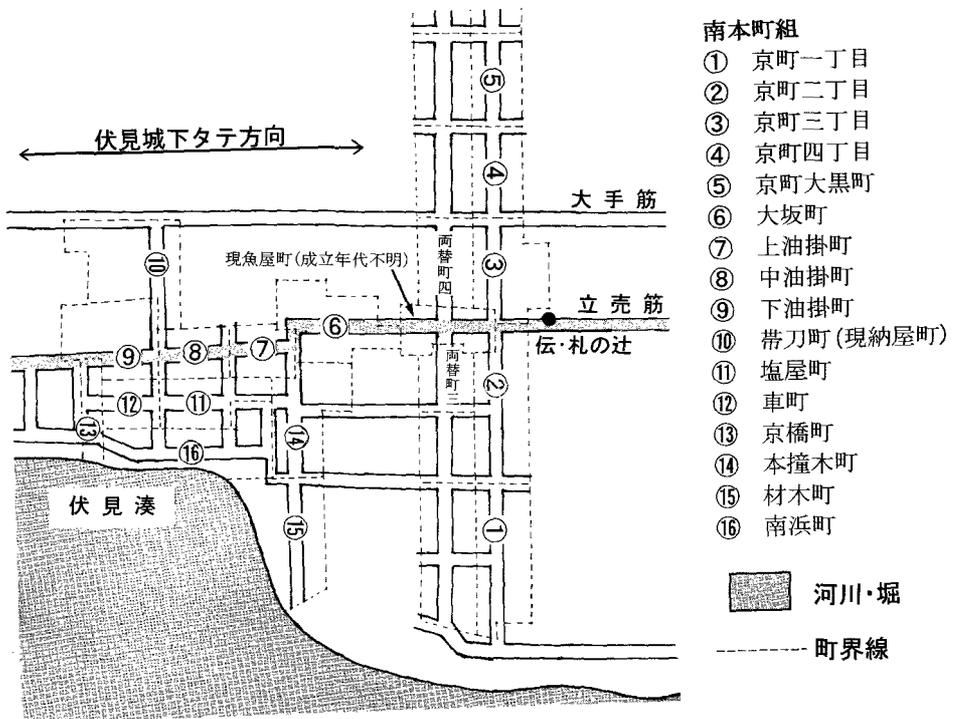
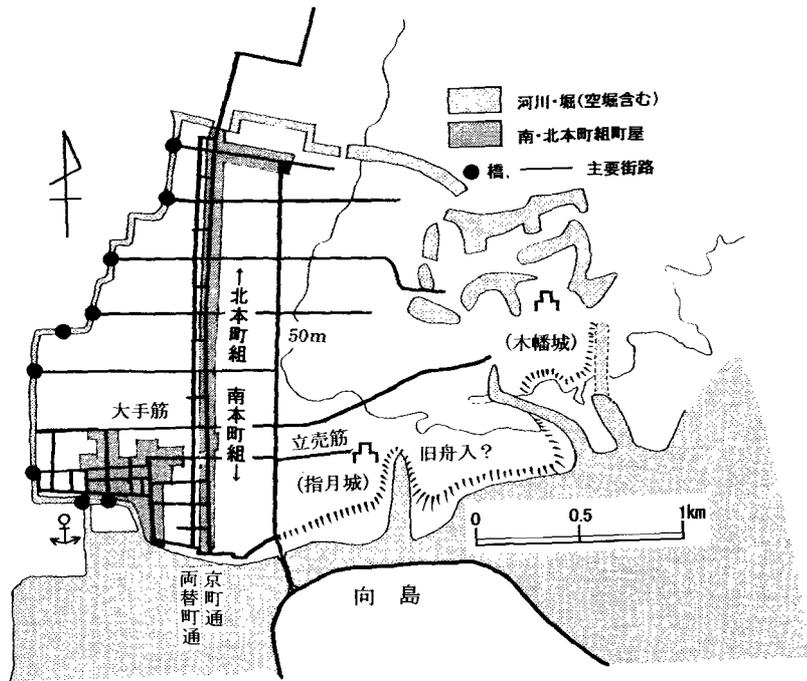


図6 伏見城下町と南本町組の町割
 「山城国伏見街衛近郊図」および『伏見鑑』所収の絵図(無題)をもとに作成。
 町界は現在のもの。

れもタテ町で、大坂町の東に隣接して現在では魚屋町⁴⁷⁾と称する町が存在することからも、伏見はタテ町型であるといえる。

(4) 慶長期大坂城下町

近年の研究で、秀吉が最晩年に再び大坂城下町の改修に着手したことが明らかにされている⁴⁸⁾。秀吉は、伏見に集中していた大名屋敷を大坂に移して三の丸を建設するため、予定地の住民の移転先として新たに船場地区が開発される(図5)。この時期の新たな開発中心は網掛けで示したが、改修は単なる部分的・付加的なマイナーチェンジではなく、旧来の町人を基本的にはほとんど移動させることを前提とした、新城下建設にも等しい大規模なものであった。ここで、大坂城下町は町の伸展方向を同一台地面上の南から、対して下町と呼ばれる西へと向きを変える。

また、発掘調査の成果からA1・A2の地点から天正期の南北路の遺構、A3の地点から南北路に間口を向けた宅地遺構が出土しており⁴⁹⁾、谷町筋以西～東横堀川以東の地区も町割が改修されたことが推測される。

その後の内部の町割を『摂州大坂絵図』⁵⁰⁾でみると、谷町筋以西では錦町一丁目・同二丁目・折屋町・豊後町と、やはり追手筋⁵¹⁾を中心にしたタテ町が形成されている。また基本的に、谷町より西では、船場地区に至るまで大手に並行する複数の街路がすべて町通りになっている。以上により、秀吉にとって最後の作品である慶長期大坂城下町においても、タテ町型への志向が継続されると結論できる。

(5) 小結

以上の検討から、秀吉は長浜・天正期大坂・伏見・慶長期大坂の全ての城下において、常にタテ町型を採用し続けたという結論を得た。歴史地理学における従来説ではヨコ町型の町割プランを創めたのは秀吉であったといわれてきたが、城下町の町割プランにおけるタテ町型を完成させた人物といえるのではないだろうか。秀吉は町割に際して、常に大手(およびそれに並行する街路)を町割プランの中心に据え、街道よりも重視し続けた。

Ⅲ. 秀吉系城下町におけるタテ町型の志向

(1) 長浜建設から関ヶ原合戦まで

本章では、秀吉が確立した城下町建設手法の影響を受ける可能性が高いと考えられる、秀吉系⁵²⁾大名の城下町の町割プランを検討したい。ここで対象とする城下町は、天正2(1574)年から慶長5(1600)年の間に建設され、町割と主要町屋の位置の確定可能もので、『日本の市街古図』⁵³⁾および『日本城下町絵図集』⁵⁴⁾等を利用して表1を作成した。

表1 秀吉系主要城下町にみられる町割のタイプ

建設年次	城下町名	城主	城のタイプ	主要町屋	町割のタイプ
1585年	近江八幡 大和郡山	豊臣秀次	平山城	本町	タテ町型
		豊臣秀長	平山城	本町	タテ町型
1588年	徳島 高山	蜂須賀家正	平山城	通り町	タテ町型
		金森長近	平山城	一番町	タテ町型
1589年	松坂 広島	蒲生氏郷	平山城	大手町	タテ町型
		毛利輝元	平城	白神町	タテ町型
1590年	熊本 岡崎	加藤清正	平山城	細工町	タテ町型
		田中吉政	平城	連尺町	タテ町型
	西尾 飯田	田中吉政	平城	中町	タテ町型
		毛利秀頼	平山城	本町	タテ町型
	松本 三河吉田	石川数正	平城	本町	タテ町型
		池田輝政	平城	札木町	ヨコ町型
	高松 岡山	生駒正親	平城	本町	タテ町型
		宇喜多秀家	平城	上之町	ヨコ町型
1592年	掛川 会津若松	山内一豊	平山城	連尺町	ヨコ町型
		蒲生氏郷	平山城	甲賀町	タテ町型
1593年	大垣 甲府	伊藤祐盛	平城	本町通	ヨコ町型
		浅野長政	平山城	八日町	タテ町型
1597年	丸亀 宇都宮	生駒正親	平城	本町	タテ町型
		蒲生秀行	平城	日野町	タテ町型

『日本の市街古図』および『日本城下町絵図集』をもとに作成、石高は藤野保校訂『恩栄録・慶絶録』、近藤出版社、1970、による。

この表から秀吉系の大名の城下町では、近江八幡・大和郡山・徳島・高山・松坂・広島・熊本・岡崎・西尾・飯田・松本・高松・会津若松・甲府・丸亀・宇都宮と、20例中16例にタテ町型への志向が強くでていることが読み取れるだろう。ヨコ町型を採る三河吉田・岡山・掛川・大垣はそれぞれ西海道・東海道をそのまま城下のメインストリートとして採用した事例であり、築城以前の街道と城郭とが距離的に乖離せず、当初の城下町プランの区画に含まれるものであるためあえてタテ町型を採らないものであると解釈できる。

(2) 関ヶ原合戦以後～元和偃武まで

関ヶ原合戦以後に家康主導による戦後処理に伴う全国レベルでの大名移封がもたらされ、城下町の建設ラッシュがおこる。ここでは、秀吉系大名が関ヶ原合戦以後、城下町を建設した例を表2にまとめた。なお、加増のみで転封を伴わずとも、城下を大幅に拡張・改修した場合は新規建設に準ずる扱いとした。

これをみると、東軍に属した秀吉系大名は、戦後大幅な加増をうけ大大名として成長

していることがわかる。そして領地替えにともない新たに城下町を建設するが、そのなかでも16例中12例の高知・熊本・高松・今治・広島・和歌山・鳥取・小浜・宮津・柳川・萩で、タテ町型の町割プランが採られている。

一方、ヨコ町型の事例は、姫路・福岡・松江・米子の4例が確認できる。池田氏の姫路の場合、前領地の吉田もともにヨコ町型であることは注目される。また福岡は、間近に中世来の商業地である博多があるため、城下町の商業地機能はさして期待されていない特殊な事例と見ることが可能だろう。松江の場合は、城のある亀田山と宍道湖・大橋川間のわずかな平地に町屋を配するという地形的条件に制約を受けたものであると理解できる。米子の場合は、先行する吉川氏の城下町が建設途上にあるという特殊な条件下で、従来のプランを残したまま、本来城下の縁辺を通る街路（後の出雲街道）を中心に新たな町屋を延長して建設した事例である。

(3) 小結～秀吉系大名にとっての関ヶ原合戦と城下町

以上の検討から、秀吉系大名の城下町で

表2 秀吉系大名の関ヶ原合戦後の知行増減

大名	旧封地・石高(万石)	新封地・石高(万石)	増加石高(万石)	増加率(%)	主要町屋とタイプ		
池田輝政	三河吉田	15.2	播磨姫路	52.0	36.8	242	本町 ヨコ町
山内一豊	遠江掛川	6.8	土佐高知	20.2	13.4	197	蓮池町 タテ町
黒田長政	豊後中津	18.0	筑前福岡	52.3	34.3	189	本町 ヨコ町
加藤清正	肥後熊本	19.5	同	51.5	32.0	164	新町 タテ町
生駒一正	讃岐高松	6.5	同	17.1	10.6	160	丸亀町 タテ町
藤堂高虎	伊予板島	8.0	伊予今治	20.0	12.0	150	本町 タテ町
福島正則	尾張清洲	20.0	安芸広島	49.8	29.8	149	本町 タテ町
浅野幸長	甲斐府中	16.0	紀伊和歌山	37.6	37.6	135	本町 タテ町
池田長吉	近江国内	3.0	因幡鳥取	6.0	3.0	100	旧中町 タテ町
加藤嘉明	伊予松前	10.0	伊予松山	20.0	10.0	100	本町 タテ町
京極高次	近江大津	6.0	若狭小浜	9.2	3.2	43	上小路 タテ町
小早川秀秋	筑前名島	35.7	備前岡山	51.0	15.3	43	変更なし
京極高知	信濃飯田	10.0	丹後宮津(田辺)	12.3	2.3	23	本町 タテ町
田中吉政	三河岡崎	10.0	筑後柳川	32.5	22.5	225	辻町 タテ町
堀尾吉晴	遠江浜松	12.0	出雲松江	24.0	12.0	100	末次本町 ヨコ町
中村一忠	駿河府中	14.5	伯耆米子	17.5	3.0	21	立町 ヨコ町
毛利輝元	安芸広島	120.0	長門 萩	29.8	-90.6	-70	呉服町 タテ町

笠谷(1994)をもとに作成。

注) 毛利氏は減封になったが、改易にはならず新城下を建設したので加えた。宮津の実際の建設は1622年から始まるが、戦後の論功行賞による新城下であるため加えた。

も、一貫して、タテ町型への志向が強いことが明らかになった。ここでは、秀吉系大名にとって、関ヶ原合戦の持つ意義と、それが城下町のプランに与えた影響を考えたい。

関ヶ原合戦後、西軍に属した諸大名より総計632万石が収公され、徳川家康の主導で、その没収高の約80%は東軍に参加した豊臣系大名に、転封をともなう加増として分配された⁵⁵⁾。かくして、秀吉系の大名は飛躍的な政治的・経済的成長を遂げる一方で、旧来の東海から畿内を中心とした豊臣勢力圏から隔絶した新しい領国において、自力救済が原則である現実に直面する必要にせまられる⁵⁶⁾。

そのような状況下、彼らにとっての城下町とは、依然領国における絶対的な首都であり、街道を中心とした全国レベルでのネットワークを構想したうえで自らの城下町を相対化して捉えることは難しいだろう。秀吉が湖北経営の拠点として長浜を建設した状況に類似した、軍事的緊張

をともなう政治的状況の中、自ずと領国経営の拠点である城下町の町割プランにおいては、城を頂点としたヒエラルキーが可視化されるタテ町型のプランが多く採用されると考えるのが妥当であろう。

豊臣政権によって完全掌握された勢力圏内に領国をもつ典型的大名ともいえる石田氏の佐和山が、ヨコ町型プランを採用している事例はその傍証となるだろう⁵⁷⁾。

IV. 徳川系大名城下町におけるヨコ町型への変化

(1) 家康の関東移封から関ヶ原合戦まで

本章では家康および徳川系大名⁵⁸⁾が建設した主要な城下町について検討することにし、以下では、まず家康の関東移封から関ヶ原合戦までの事例を検討する(表3)⁵⁹⁾。

天正18(1590)年、小田原後北条氏の滅亡後関東移封になった家康は、江戸を居城と定め、中世の江戸城と浅草を結ぶ街道を大手として主要町屋である本町をおき、タテ町型の町割プランを採る城下町を建設した⁶⁰⁾。

同時に家康は上級家臣の知行割を行い、上野箕輪を井伊直政(12万石、後に同国高崎)、上野館林を榊原康政(10万石)、上総大多喜を本多忠勝(10万石)、武蔵忍を四男の忠吉(10万石)、小田原を大久保忠世(4万石)に与える。ついで北武蔵・下総などの比較的江

表3 徳川系主要城下町にみられる町割のタイプ

建設年次	城下町名	城主	城のタイプ	主要町屋	町割のタイプ
1590年	大多喜 館林 箕輪	本多忠勝	山城	大町	ヨコ町型
		榊原康政	平城	並木町	タテ町型
		井伊直政	平山城	連雀町	タテ町型
江戸/天正度	徳川家康	徳川家康	平城	本町	タテ町型
		井伊直政	平山城	連雀町	タテ町型
		奥平信昌	平城	本町	ヨコ町型
1598年	高崎	井伊直政	平山城	連雀町	タテ町型
		加納	平城	本町	ヨコ町型
		土浦	平城	本町	ヨコ町型
1601年	福井	結城秀康	平城	上町	ヨコ町型
		膳所	平城	大津町	ヨコ町型
		桑名	平城	本町	ヨコ町型
1602年	厩橋	酒井重忠	平城	本町	タテ町型
		田中(藤枝)	平城	本町	ヨコ町型
		酒井忠利	平城	本町	ヨコ町型
1603年	江戸/慶長度	徳川家康	平城	日本橋通(町)	ヨコ町型
		磐城平	平山城	本町	ヨコ町型
		井伊直継	平山城	上・下本町	ヨコ町型
1607年	彦根	徳川家康	平城	札の辻町一七間町	タテ町型
1609年	丹波亀山	岡部長盛	平山城	本町	ヨコ町型
1610年	篠山	松平康重	平山城	上・下二階町	ヨコ町型
		徳川義直	平城	本町	タテ町型
		平岩親吉	平山城	本町	タテ町型
1611年	越後高田	松平忠輝	平城	本町	ヨコ町型
		佐倉	平山城	呉服町	ヨコ町型
		伊賀上野	平山城	横町	ヨコ町型
津	藤堂高虎	藤堂高虎	平山城	本町(東町)	ヨコ町型
		藤堂高虎	平城	大門町	ヨコ町型

『日本の市街古図』および『日本城下町絵図集』をもとに作成。
石高は藤野保校訂『恩栄録・魔絶録』、近藤出版社、1970、による。

戸に近い旧北条氏の支城に1～3万石の家臣を入れ、そして江戸近郊の地はさらに知行高の低い家臣に与えた。これは新しい領国の縁辺に、自力で城下の建設が可能な高禄の家臣を配したものであると理解できる。

忍は同時期に城下町の整備された範囲が不明であり、北条氏の居城であった小田原では大きな改変はみられなかったことが推測されるが、箕輪・館林⁶¹⁾・高崎⁶²⁾の3例がともに大手通を中心として主要町屋が配されるタテ町型の町割プランを採る。新設城下町のうち唯一、大多喜は当初よりヨコ町型のプランを採るが、これは城郭と町屋の垂直距離的乖離の大きい山城の事例である。

(2) 関ヶ原合戦以後～元和偃武まで

関ヶ原合戦の直後に建設された城下町は19例になるが、そのうち加納⁶³⁾をはじめとして、15例でヨコ町型が採られている。また、前節でタテ町型の事例とした館林においては、すでに慶長2(1597)年に、新たに引き込んだ街道を中心として、ヨコ町型のプランに改変されている。おなじく政治の中心となった江戸も、慶長8(1603)年からの天下普請により、タテ町型からヨコ町型へ変化した。

その変化を図7を使って説明すると、拡張

前の天正期の町割は、大手口を起点に、主要な町である本町一丁目～四丁目・大伝馬町がタテ町をなして続き、またそれに本石町・本銀町が並行するという完全なタテ町型であった。しかし慶長8(1603)年に日本橋が架設されると、大手と交差する日本橋通(東海道)を中心とした町割がはじまり、日本橋を起点として南に日本橋通一丁目～四丁目と町が続き、北西へも室町一丁目～三丁目と町が続く、ヨコ町型のプランへと変化する。

そして、大坂包圍網⁶⁴⁾構築の一環として、天下普請によって建設された膳所・彦根・丹波亀山・篠山といった城下町はいずれもヨコ町型を採る。箕輪・高崎でタテ町型のプランをとった譜代筆頭の井伊氏⁶⁵⁾が、彦根においてはヨコ町型に変化することは重要であろう。図8をみると、彦根城下町の内町の中で、主要町屋である本町・連着町・白壁町⁶⁶⁾が大手に対して直交する方向に連続したヨコ町を構成する。なお、本町は『彦根惣町絵図』⁶⁷⁾によれば上本町・下本町に分かれ、大手通りが町界であったことが推測される⁶⁸⁾。

また彦根とは対称的に、親藩で最も石高の低い部類に属する松平氏の篠山城下町⁶⁹⁾では、町立てはすべて城郭および武家地の周囲をめぐる街道を中心にして(上・下)河原

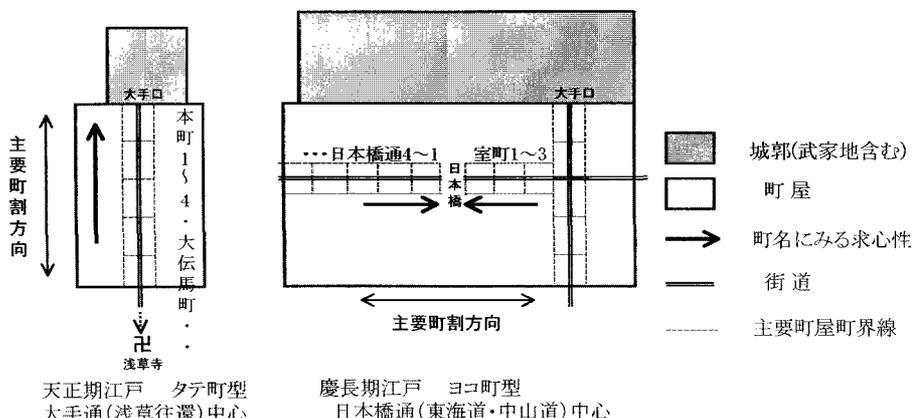


図7 江戸における町割変化のモデル
鈴木理生『江戸の都市計画』、三省堂、1988、をもとに作成。

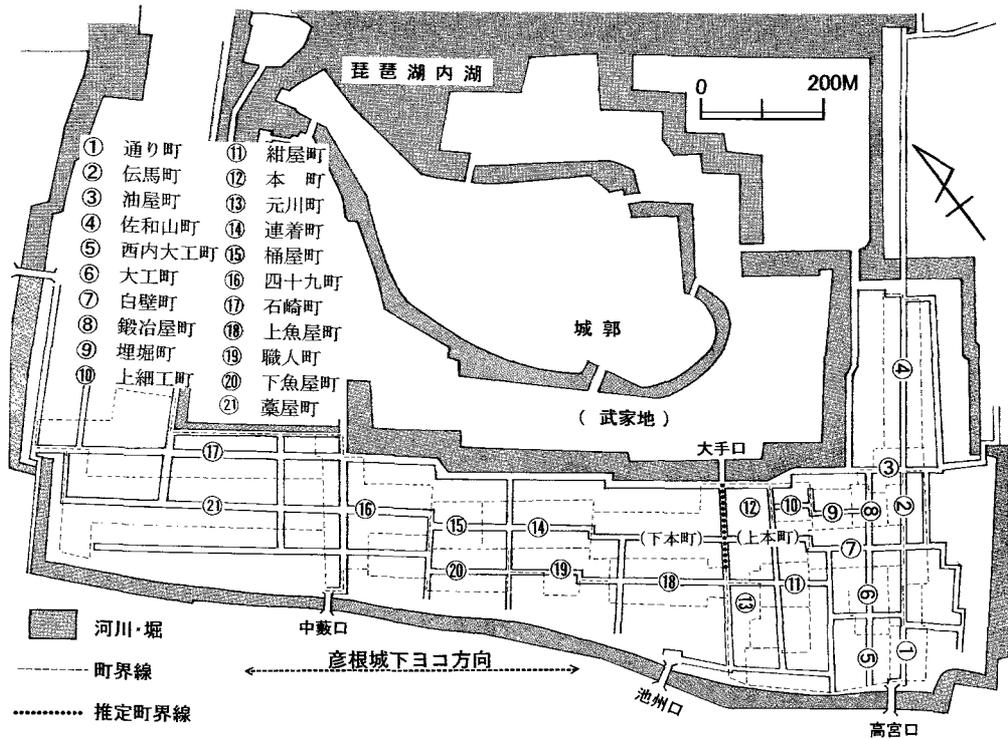


図8 彦根城下町における町割

『御城下惣絵図』（彦根博物館編『彦根の歴史』、1991、所収）をもとに作成。
町界は『明治7年地券取調総絵図』による。

町・(上・下)立町・呉服町・(上・下)二階町・魚屋町・(上・下)西町が一例に配列されている(図9)。このうち八上城下より移って城下町の主要な町屋をなす上二階町・下二階町・呉服町・魚屋町⁷⁰⁾をはじめ、いずれも城をめぐる形をなすヨコ町を形成している。

一方、タテ町型の事例も4例あるが、そのうち駿府⁷¹⁾・名古屋⁷²⁾が徳川氏の居城であることについて注目したい。駿府はかつて今川氏の居城であったが、家康は將軍職を秀忠に譲った後、単なる隠居所としてではなく、大御所として江戸に並んで二元政治を行う徳川政権の中核都市とするべく天下普請で城下の改修を行う。主要町屋は、大手を中心にした札の辻町・七間町一丁目～三丁目であると考えられ⁷³⁾、タテ町を形成している。

同じく、徳川義直⁷⁴⁾の名古屋は、対大坂

の中間拠点として、清洲から城地を移して天下普請で城が建設された。城下の町割が正式に行われたのは慶長17(1612)年からであるが、主要町屋である本町は大手通り(熱田街道)を中心にタテ町を形成している。また、その他の町でも清洲から移転した町が基本的にタテ町を形成している⁷⁵⁾ことをあわせて考えると、名古屋はタテ町型であるといえる。

(3) 小結-徳川系大名にとっての関ヶ原合戦と城下町

以上の検討から、徳川系城下町では、関東移封後から関ヶ原合戦以前にかけてはタテ町型への志向が強かったが、関ヶ原合戦後はヨコ町型へと主流が変化することが明らかになった。ここでは、徳川系大名にとっての関ヶ原合戦の意義と、それが城下町のプランに

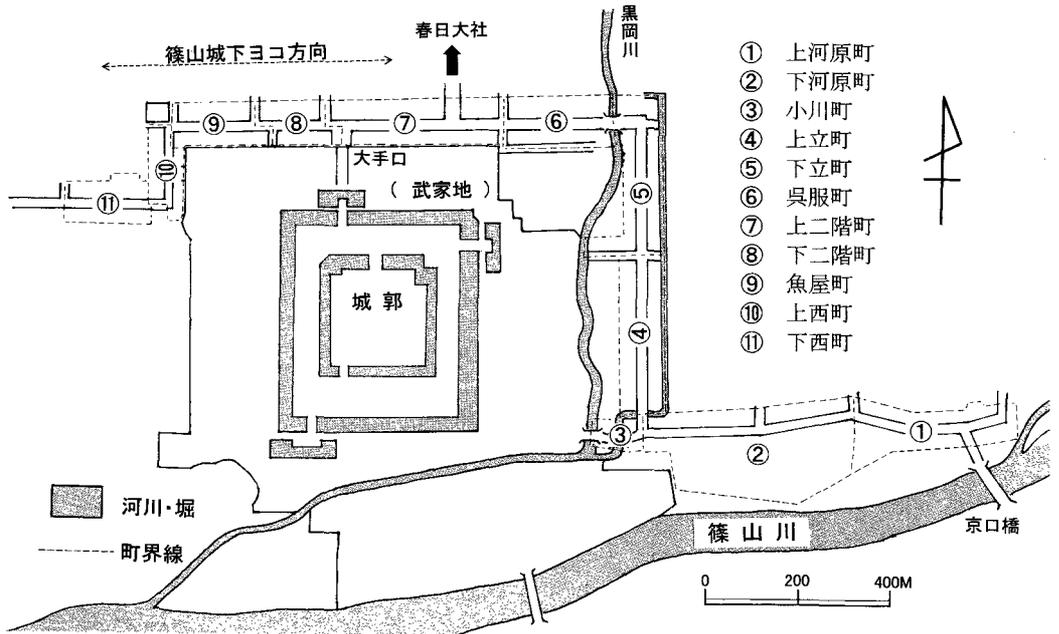


図9 篠山城下町における町割

「丹波国篠山御城全図」(篠山史友会『丹波篠山城とその周辺』, 1992, 所収)をもとに作成。
町界は『明治26年字限図』による。

与えた影響を考えたい。

家康は関ヶ原合戦後直ちに、臨時に城を接收した東海道筋の諸大名を西国に大幅加増のうえ転封させ、関東移封以前のかつての領地に再び自らの家臣を封じる⁷⁶⁾(表4)。そのうえで美濃・伊勢・近江・山城・大和・丹波・摂津・河内・和泉・但馬・備中国に国奉行を

配し⁷⁷⁾、関東から畿内へと続く広大な勢力圏を築く。

これをみると、徳川系の大名によって建設された多数の城下町の配置は統一政権へと成長するための重要な布石であり、東海道の要衝を家臣が独占し、また大坂包囲網を形成するかたちで全国展開をとげたことがわかる。また、この際に建設された譜代および親藩(非徳川姓)の城下町は多くの場合ヨコ町型の町割りプランをもつ。これはまさしく「江戸時代の街道は名実ともに全国支配の大動脈であった。したがって、それは各城下の大手通をはるかにしのぐ[地位]を占めなければならない⁷⁸⁾」という考え方の町割りプランにおける具現化に他ならない。なにより関ヶ原合戦における一連の軍事行動の中で、徳川が諸城を接收しえた東海道ルートと対照的に、それのかなわなかった中山道では行軍に大きな障害があった⁷⁹⁾という事実は、豊臣政権を滅

表4 東海道筋諸城における城主の変遷

城名	城主	戦後所領	戦後城主
沼津城	(中村氏)		大久保忠佐
興国寺城	(中村氏)		天野康景
駿河府中城	中村一忠	米子	徳川直轄領
掛川城	山内一豊	高知	松平定勝
遠江横須賀城	有馬豊氏	福知山	松平忠政
浜松城	堀尾忠氏	松江	松平忠頼
三河吉田城	池田輝政	姫路	松平家満
岡崎城	田中吉政	柳川	本多康重
西尾城	(田中氏)		本多康俊
刈谷城	水野勝成	同	同
清洲城	福島正則	広島	松平忠吉
犬山城	石川貞清	改易	小笠原吉次

笠谷(1994)をもとに作成。

ぼして全国支配を確立するために、街道を掌握することの重要性を再認識させる契機となったであろうことは想像に難くない⁸⁰⁾。

ここで関ヶ原合戦以前の状況を見ると、旧北条領に国替えさせられた非秀吉系である徳川系の大名にとっては、領国経営に対する抵抗や障害が想定される状況が続く。そのような状況下では、江戸をはじめ領土の縁辺に配置された城下町においては、絶対的な領国経営の拠点を築く必要性から求心的なタテ町型プランが採用されるといえるだろう。これは、関ヶ原合戦後も同じく家康が江戸と二元政治を行う拠点とした駿府⁸¹⁾とともに、豊臣政権の本貫地である尾張⁸²⁾に名古屋を建設する場合においても同様のことがいえるだろう。

V. おわりに一秀吉および秀吉系の城下町と徳川系城下町の比較

(1) 町割プランと街道

以上での検討から明らかになったように、秀吉および秀吉系大名の城下町における町割プランでは、タテ町型が基本的で、それは関ヶ原合戦後も継続した。関ヶ原合戦の戦功による国替えで地理的にも独立性が高まり、城下町とは自らの領国における絶対的な中心であるという意識が保持され続けるとするならば、その結果、町割プランの選択に際し、街道を中心にした全国レベルのネットワークは重視されなかったとみるべきであろう。

これに対し、家康および徳川系大名の城下町における町割プランでは、関ヶ原合戦以前はタテ町型が基本であったが、関ヶ原合戦以後、家康の居城および徳川姓を名乗る実子の居城は別として、ヨコ町型が卓越し、同時に篠山の事例のように「大手から直線的に伸びる道」が完全に消滅する傾向さえ認められる。

町割プランと街道のルートの関係について改めてまとめてみると、秀吉が建設した城下

町では、従来の街道を否定して城下に新たなルートを引き込み、しかも、そのルートに関係なく大手を中心にして主要町屋を町割するという手法がとられた。関ヶ原合戦以後の徳川系の城下では江戸（東海道・中山道）をはじめとし、街道のルートが従来のまま利用されたか否かに関わらず、街道を中心にして主要町屋を町割するという手法がとられた。その例は、加納（中山道）・土浦（水戸街道）・膳所（東海道）・桑名（東海道）・田中（東海道）・丹波亀山（山陰道）・篠山（篠山街道）・佐倉（成田道）・伊賀上野（大和街道）・津（伊勢参宮街道）など極めて多い。

すなわち、徳川系大名が経営した城下町は、戦略的要請に基づき「街道を扼する」機能を有することに重点が移ったと理解できるだろう。このような城下町の町割プランに、街道を中心にした徳川勢力圏内のネットワーク重視の姿勢をよみとることも可能であるといえよう。

結論的にいえば、町割プランにおいて、タテ町型は大手を中心にして領国内経営を重視するものであり、ヨコ町型は大手にクロスする街道を中心にしてネットワークを重視するものであるといえるだろう。ここでは、本節のまとめとして図10を提示しておきたい。

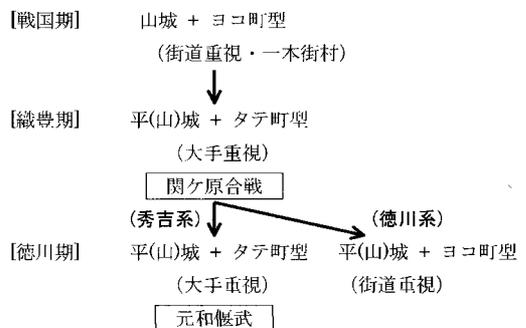


図10 町割プランの変化

(2) 町名にみる内部構造

本節では、前節の結論を補強すべく、プラ

ンとも密接にかかわる町名について検討したい(図11)。

まず、秀吉の城下町から、長浜と伏見について検討する。ここで、長浜の各町名をみると、北国街道を中心とするヨコ町に、順位性を表す上・中・下を冠した呉服町と、上・下を冠した船町が確認できる⁸³⁾。これを模式的に図化すれば、大手同様に重視された本町通りを基準に、階層的に配置されていることがわかる。また伏見においても、タテ町を形成する上・中・下を冠した油掛町があり⁸⁴⁾、京町でも城に近い方から一丁目が始まっており、城郭を中心とした順位性があることがわかる。この2つの事例から、秀吉の城下町においては、上・下、一・二といった順位性を町名に冠する町の基本的な配置には、城郭を中心とした求心性が現れているといえるだろう。

次に、徳川系城下町から、篠山と彦根について検討する。篠山にはそれぞれ上・下を冠した河原町・立町・二階町・西町がある。この配置を見ると、すべて京口を中心として順に上・下それぞれの町が配されていることがわかる。また彦根においても、かつての上・下本町および上・下魚屋町の配置は城ではな

く街道に中心があることがわかる。この2つの事例から、徳川系城下町においては、上・下といった順位性を町名に冠する町の基本的な配置には、街道(=その先の江戸)を中心とした求心性が現れているといえるだろう。

(3) まとめと今後の課題

以上でみたように、秀吉および秀吉系の城下町においては町割プラン・町名ともに城に対する求心性が強くあらわれていることに対し、徳川譜代の城下町では城に対する求心性をもたない町割プラン・町名が採用されていることがわかった。

全国的な統一政権を構築する途上にあった豊臣政権においては、地理的にまとまりをもった勢力圏は東海から畿内にかけての地域にしか形成しえず、そこには大坂詰めと比較的知行高の低い中央官僚的な大名⁸⁵⁾が配され、その外側に大身の大名が各々局地的な独立勢力圏を築くという知行形態が展開され、この傾向は関ヶ原合戦後も強化される。

一方、関ヶ原合戦後、関東から一部中国にかけて形成された広域な徳川勢力圏の中では、「大坂包囲網」構築のための都市間ネットワーク、すなわち街道掌握の重要性が認識され、徳川系の大名の城下町は同一勢力圏内の一拠点として相対化される。この特徴は、徳川譜代大名の知行高が秀吉系大名と比較して一般的に低いことや、頻繁におこる領地替えおよび江戸・駿府詰めであることが多いこととも深い関係があろう。

以上、本稿では、不安定な政治状況下における領国内の絶対的首都として機能した城下町はタテ町型が多く、安定した権力のもとで相対化された一拠点として機能した城下町はヨコ町型が主流になることが確認できた。この結論は、宮本がヴィスタを論じて到達した結論と同様ではあるが⁸⁶⁾、この街道重視によるタテからヨコへの変化の根底に存在するのは、経済効率の優先というより、むしろ

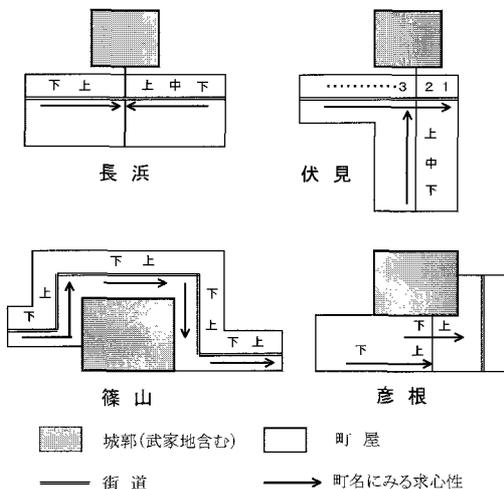


図11 町名にみる求心性

戦略的要請を優先したという側面が強く出ているとみるべきであろう。つまるところ、関ヶ原合戦は全国的な安定した権力を構築しえず、全国レベルで都市プランの規範を変化させるにはいたらなかったのである⁸⁷⁾。

また、徳川勢力圏内におけるヨコ町化に先行して、尾張国内においてヨコ町型城下を建設した織田系大名が存在し⁸⁸⁾、前田氏の金沢、富山では当初よりヨコ町型が採られることも重要であろう。これを、中世的なプランを払拭できずにいる段階とみるか、秀吉系よりさらに新しい近世的なプランとみるかという問題もあわせて、本稿ではふれられなかったヨコ町型からタテ町型への画期を検討することを今後の課題として本稿の終わりとしたい。

(奈良女子大学大学院・院生)

[付記]

本稿は2001年度日本地理学会春季大会における口頭発表内容をもとに加筆、修正いたしました。学会発表においては、会員諸氏に多くのご教示を頂きました。また、資料の収集、閲覧に際し、彦根市史編纂室をはじめとする多くの方々にご協力頂きました。

本稿作成にあたり、終始ご指導下さいました奈良女子大学大学院社会・地域学講座の先生方にお礼申し上げます。なお、本研究には平成13年度奈良女子大学文学部RAプロジェクトの一部を使用しました。記して感謝いたします。

[注]

- 1) 小野 均 (晃嗣) 『近世城下町の研究 増補版』, 法政大学出版局, 1993, (初版至文堂, 1928)。
- 2) 藤田元春「条里の影響と近世の地割」『尺度綜考』, 臨川書店, 1971, 350~363頁, (初版刀江書院, 1929)。
- 3) ①矢守一彦「城下町プランの変容過程」, 『都市プランの研究』, 大明堂, 1970, 247~285頁。②同『城下町のかたち』, 筑摩書房, 1988, 3~84頁。
- 4) 松本豊寿『城下町の歴史地理学的研究』, 吉川弘文館, 1967, 293~304頁。
- 5) 小島道裕「織豊期の都市法と都市遺構」, 国立歴史民俗博物館研究報告 8, 1985, 251~293。同「戦国・織豊期の城下町」, (高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門 II 町』, 東京大学出版会, 1990), 21~39頁。
- 6) 前川要『都市考古学の研究—中世から近世への展開—』, 柏書房, 1991。
- 7) ①宮本雅明「近世初期城下町のヴィスタに基づく都市設計 1」, 建築史学 4, 1985, 128~136頁。②同「近世初期城下町のヴィスタに基づく都市設計 2」, 建築史学 6, 1986, 72~103頁。③同「城下町の類型—縦町型から横町型へ」・「ヴィスタと景観演出」, (高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集日本都市史』, 東京大学出版会, 1993), 172~173頁・174~175頁。
- 8) 建築学・近世史を中心として1990年に結成された。それに先立つ活動の一環として, ①高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門 I 空間』, 東京大学出版会, 1989。②同『日本都市史入門 II 町』, 東京大学出版会, 1990。③同『日本都市史入門 III 人』, 東京大学出版会, 1990。が出版され, その姉妹編として④高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集日本都市史』, 東京大学出版会, 1993。がある。また, 1993年より同学会の刊行物に『年報都市史研究』がある。
- 9) 吉田伸之「城下町の祖形」, 年報都市史研究 1, 1993, 37~47頁。
- 10) 玉井哲雄「町割・屋敷割・町屋—近世都市空間成立過程に関する一考察」, 年報都市史研究 2, 1994, 68~85頁。
- 11) 小林健太郎「歴史地理学の課題と展望」, 地理 24-1, 1979, 51~56頁。
- 12) 玉井哲雄「都市史における都市空間研究」, 前掲8) ①, 131~150頁。
- 13) ①矢守一彦「城下町プランにおける [近世]—とくに町割における [縦] と [横] について—」, (豊田武・原田伴彦・矢守一彦編『講座日本の封建都市 3』, 文一総合出版, 1981), 144~169頁。②同「近世城下町の空間構造—とくに町割りの基軸について—」, (矢守編『城下町の地域構造』, 名著出版, 1987), 373~387頁。

- 14) ①足利健亮『中近世都市の歴史地理』, 地人書房, 1984, 111~132頁, 221~230頁。②同『地理から見た信長・秀吉・家康の戦略』, 創元社, 2000, 7~26頁, 157~193頁。
- 15) 中林保「城下町鳥取の形成」, 前掲13) ①, 265~300頁。
- 16) 前掲14) ①。
- 17) 前掲3) ②。
- 18) ①前掲7) ③。②宮本雅明「城下町の空間類型」, 年報都市史研究 2, 1994, 3~15頁。③同「都市空間の均質化と近世都市の建設」, 中世史研究 5, 1998, 13~39頁。④同『朝日百科・日本の国宝別冊 5 城と城下町』, 朝日新聞社, 2000, 2~31頁, 35~51頁。
- 19) 天守や大手門といった建築物を公権力の象徴として捉えたという点は、従来の歴史地理学にない新しい視点であるといえるだろう。
- 20) 米沢市蔵『越後国郡絵図』(慶長2年), 東京大学出版会, 1987。所収の瀬波郡絵図。
- 21) 中島義一「タテマチ・ヨコマチ論の拡大」, 駒澤大学文学部研究紀要50, 1992, 37~49頁。
- 22) 前掲3) ②, 81頁。
- 23) 金坂清則「矢守一彦の著作目録と地理学研究—地理学の潮流のなかで—」, 日本学報12, 1993, 65~94頁。
- 24) 拙稿「藤堂高虎の城下町建設にみる織豊期城下町プランの受容と展開」, 歴史地理学42-5, 2000, 23~40頁。
- 25) 固有の町名としての「立町・堅町」もしくは「横町」, またメインストリートの意をあらわすタームとして城郭との相対的位置と関わりなく「立町・堅町」が使われることや、副次的な町の意として「横町」という言葉が使われる例があることが従来の城下町における町割プランの議論を複雑にし、また、矢守・足利両氏それぞれの定義が異なるために議論がかみ合わなかったことも事実である。
- 26) 近世の都市では街路で区画されたブロックが町の単位ではない。基本的に、街路(町通り)を中心にブロックを二分割した両側町で一つの町を構成するのが一般的である。
- 27) 城下町における領主による町人支配および自治の単位であり、新たな転入者は、家主のみならず町とも契約を交わす必要があった。塚本明「借屋請人」, 前掲8) ③, 222~223頁。その中で、住民主導で宅地割が変化する可能性があると思われるので、本稿では宅地割の概念は持ち込まない。
- 28) 主要な町の判断基準になる条件としては、1 成立の時期, 2 名称, 3 住民の階層, 4 場所(土地条件)などが考えられる。また、これらに関連するものではあるが、地子免であるか否か・中心街路の幅員・一軒あたりの地積(特に間口)なども参考になる。
- 29) 秀吉は以前にも城番として信長より城を与えられたことはあるが、「一国一城の主」に昇格して城下町を建設することが可能になったことの意義は大きい。
- 30) 森岡栄一「長浜城下町の成立について」, 滋賀県立琵琶湖文化館研究紀要 6, 1988, 17~42頁。
- 31) 『元治元年長浜町切絵図』(「上船町」, 「下船町」), 1864。(市立長浜歴史博物館編『湖北の絵図 長浜町絵図の世界』, 市立長浜歴史博物館, 1987, 54・56頁, 所収)なお下船町では東西路上にも町名が表記してあり、宅地もこれに向いている。
- 32) 前掲13) ②, 375頁。
- 33) ①矢内昭「城下町と周辺の開発」(大阪市編『新修大阪市史 3』, 大阪市, 1989), 116~138頁。②内田九州男「豊臣秀吉の大坂建設」(網野善彦・石井進・福田豊彦編『よみがえる中世2』, 平凡社, 1989), 34~55頁。③内田九州男「都市建設と町の開発」, 前掲8) ②, 41~57頁。
- 34) 城郭の南方の上本町筋周辺および平野町一帯は、上町台地上(標高約10m以上)でもさらに高い標高20m以上の高位面である。
- 35) 文化 3 (1806) 年刊。前掲33) ②, 201頁, 所収。
- 36) 上本町の名称は後に本町が出来たことにより変化した可能性がある。
- 37) 内田九州男「中世都市から近世都市へ—大坂城下町成立の意義—」(網野善彦・石井進・荻原三雄編『帝京大学山梨文化財研究所シン

- ポジウム報告集「中世」から「近世」へー考古学と中世史研究5ー』, 名著出版, 1996,) 82頁。所収。
- 38) 前掲33) ②。
- 39) 山田邦和「伏見城とその城下町の復元」(日本史研究会『豊臣秀吉と京都ー聚楽第・御土居と伏見城』, 文理閣, 2001,) 198~240頁。
- 40) 前掲14) ①111~132頁。秀吉の城下はすべてタテ町型だったが, 最後の作品である伏見でヨコ町型への転換があり, それは近世城下町建設史上の転換でもあったと論じる。その背景には街道を中心にして大和(郡山)と京(聚楽第)を結ぶ意図があったとも説く。
- 41) ①小和田哲男『城と秀吉ー戦う城から見せる城へー』角川書店, 1996。②中村博司「秀吉の大坂城拡張工事についてー文禄三年の惣構普請をめぐる」(渡辺武館長退職記念論集刊行会編『大坂城と城下町』思文閣出版, 2000,) 23~43頁。文禄3(1594)年の大坂城の惣構普請も, 同じく秀次兄弟への示威行動であるという解釈がなされている。
- 42) 秀保と秀次は実の兄弟である。
- 43) 前掲14) ①128頁。
- 44) 当時は, 現大手筋には架橋されていない。
- 45) 後に描かれた『豊公伏見城ノ図』(『伏見町志』, 1929。所収。)では, 旧伏見指月城地よりでる東西路が描かれる。
- 46) 『伏見鑑』, 安永9年(1781)刊。(『新撰京都叢書 第五巻』, 臨川書店, 1986, 35~102頁所収。)「讃岐町 俗に札の辻といふ」という記述がある。また, 関ヶ原合戦直後にもこの地に高札が建てられている。伏見町役場編『京都伏見町誌』, 臨川書店, 1974, (初版1929) 317頁。
- 47) 北の本町組に属する魚屋町とは異なる。前掲14) ①109頁所収のトレース図(元図は「山城国伏見街衛近郊図」, 寛文10年, 京都大学附属図書館蔵, であると思われる)では, 魚ノ棚町と表記され, 京町に並行する両替町三丁目・四丁目の間を分断する。南本町組にみられない町であるが, 位置から考えて大坂町から分かれた町である可能性も残る。
- 48) 前掲33) ②, ③。
- 49) 佐久間貴志「天下一の城下町」(網野善彦・石井進・福田豊彦編『よみがえる中世2』, 平凡社, 1989), 110~132頁。なお, A1・A2の地点の道路遺構は正南北ではなく道幅も狭い。しかし, 江戸期を通じて東西路が町通りをなしていることと対照的であることは注目すべきであろう。
- 50) 天明9(1789)年刊。前掲33) ②, 113頁。所収。
- 51) 伏見と同様, 現在に続くこの大手筋にも, 徳川期に設定された大手である可能性は残る。その傍証として, 一連の「大坂の陣図屏風」などに描かれる合戦風景では, すべて東横堀川にかかる思案橋が落とされていることをあげておきたい。本来ならば「大手橋」であるべきはずの思案橋ではなく, 本町橋が残されていることには疑問が残る。
- 52) 「織豊系」という語が使われることも多いが, 本稿では豊臣家の一門および家臣という意味で「秀吉系」を使用する。(例えば前田氏は織豊系ではあるが秀吉系ではない。)ここでは, 信長からの与力や旧族系の大名で本来は秀吉の家臣ではなくとも, 秀吉の関白任官(天正13年)以前に帰属が決定していた場合, その後に建設した城下町に限って含めた。
- 53) ①原田伴彦・西川幸治編『日本の市街古図 西日本編』, 鹿島出版会, 1972。②原田伴彦・西川幸治編『日本の市街古図 東日本編』, 鹿島出版会, 1973。
- 54) ①矢守一彦編『日本城下町絵図集 近畿編』, 昭和礼文社, 1982。②村井益男編『日本城下町絵図集 関東甲信越編』, 昭和礼文社, 1982。③原田伴彦・矢守一彦編『日本城下町絵図集 東海北陸編』, 昭和礼文社, 1983。④原田伴彦・矢守一彦編『日本城下町絵図集 中国四国編』, 昭和礼文社, 1984。⑤原田伴彦・矢守一彦編『日本城下町絵図集 九州編』, 昭和礼文社, 1986。
- 55) 笠谷和比古『関ヶ原合戦 家康の戦略と幕藩体制』, 講談社, 1994。なおここでは, 徳川系でも旧族系でもないという意味で, かつての織田系を含めて「豊臣系」が使われているので, 本稿が対象とする「秀吉系」とは若干の相違がある。

- 56) 豊臣政権の中央官僚が多く属した西軍の敗北は、結果的に豊臣家自体の弱体化を招いた。また、このときの国替えに際して知行宛行状は発給されておらず、元和偃武の後に秀忠の名前で一斉に発給される。水林彪『日本通史Ⅱ 封建制の再編と日本的社会の成立』、山川出版社、1987、155～168頁。
- 57) 1998年度歴史地理学会大会における富田泰弘氏の報告による。
- 58) 江戸期に親藩・譜代と称される家をさす。
- 59) 前掲56) でみたように 秀吉系の大名には知行宛行状が発給されなかったが、藤堂氏には慶長16年の伊賀および伊勢への国替えに際し、秀忠より知行宛行状が発給されているので譜代に準ずるとみることができる。「賜書録」、上野市古文文献刊行会『宗国史上』、上野市、1979、392～393頁、所収。
- 60) ①玉井哲雄『江戸－失われた都市空間を読む』、三省堂、1988。②同「本町通りから日本橋通りへ」、前掲8) ①、234～235頁。
- 61) 先行研究として、関戸明子・木部一幸「館林城下町の歴史の変遷と地域構造」、歴史地理学40-4、1998、19～37頁。がある。
- 62) 先行研究として、関戸明子・奥土居尚「高崎城下町の形成過程とその地域性」、歴史地理学38-4、1996、1～20頁。がある。
- 63) 前掲14) ①、136～138頁。
- 64) 堀崎嘉明「幕藩制成立期における城普請について」(『日本近世史論叢 上巻』、吉川弘文館、1984、) 64～93頁。
- 65) 彦根転封の時点において18万石で、後には最大35万石まで増加する。
- 66) 井伊氏は箕輪・高崎ともに大手を中心にして連雀町を町割している。彦根の連雀町も転封に従った連雀商人を中心に構成されていると考えられる。白壁町の町名の由来は有力商人の住む白壁の家からきている。
- 67) 宝暦6(1756)年作成。(彦根城博物館編『彦根の歴史』、1991、94頁。) 所収。
- 68) 『明治7年地券取調総絵図』(滋賀県立図書館蔵)においても「本町」として一つの字になっており同部分においては町家並図が確認されていないが、16世紀中期作成の『彦根士族屋敷絵図』(彦根市立図書館蔵)では、大手をはさんで上本町・下本町の表記がある。
- 69) 城主の松平康重(家康の庶子)の篠山転封の時点においては5万石である。
- 70) 旧八上城下から移転したもの。また城の正面に立地する呉服町・魚屋町もおなじく旧八上城下に起源をもつ。藤田達生「八上城とその城下町の変容」(八上城研究会編『日本史研究叢刊12 戦国・織豊期城郭論－丹波国八上城遺跡群に関する総合研究－』、和泉書店、2000)、17～51頁。
- 71) 先行研究として、若尾俊平「城下町駿府の形成」(前掲13) ①、) 242～264頁。
- 72) 先行研究として、茨志麻「“近世城下町名古屋の形成について”－遷府以前の様相とその都市建設の手法を中心に－」、年報都市史研究4、1996、99～116頁。
- 73) 七間町通り(大手)は、その名の通り他の街路より幅員が広い。
- 74) 家康の九男。本来、尾張国の大半を家康の四男忠吉が清洲を居城として知行したが、慶長12(1607)年に死去、無嗣断絶となり義直が襲封した。しかし義直は幼少であったため駿府に留め、付家老の平岩親吉を犬山城に入れ尾張の政務を執らせた。同15(1610)年より名古屋城下町の建設が始まるが、義直の名古屋入城は元和2(1616)年なので実際には家康の城といってもよいだろう。
- 75) 前掲72)、106頁。
- 76) 前掲55)、168～174頁。
- 77) 前掲56)、158～159頁。
- 78) 前掲14) ①、129頁。
- 79) 前掲55) 116～126頁。
- 80) 関ヶ原合戦後、家康は直ちに東海道の宿駅伝馬制を敷くが、これは、「軍事的」帰結であると指摘されている。土田良一『近世日本の国家支配と街道』、文献出版、2001、1頁。
- 81) 駿府の家康は、秀忠に対して主導的立場を保ちつづけた。家康の死去以前は、駿府が事実上の徳川政権の中心であるといえよう。
- 82) 秀次の死後、一部は福島正則に与えられたが、大部分は秀吉の直轄領となり尾張平野開墾のため多大な資本が投下されたとの指摘がある。「特集－シンポジウム－織田・豊

臣政権と尾張」, 織豊期研究1, 1999, 3~72頁。

- 83) これらの町名は地形と対応していない。
- 84) 油掛町の場合, 上・中・下は地形に対応したものである可能性も残る。しかし, 町名の由来となった油掛地蔵を有する西岸寺は, 下油掛町にあることを指摘しておきたい。
- 85) 畿内に所領を有する中央官僚である彼らは, 同時に, 豊臣家蔵入地の代官を兼ねることも多かった。一円知行型ではないうえに, 城には蔵入地の管理地という性格が強かったため, 本格的な城下町経営には至らないことが一般的である。朝尾直弘「知行の性格」, 『將軍権力の創出』, 岩波書店, 1994, 78~92頁。
- 86) 前掲18)。
- 87) 本稿では, 大名とその家臣団の基本的性格

を, 「合戦によって所領を守り・増加させること」を目的とした戦闘集団であると捉え, 彼らの城下経営にみる政略的, 戦略的側面に注目した。元和偃武(大坂の陣が最後の武力闘争である)以後の全国的に安定した社会における, 経済原理を優先した街道重視の問題については稿を改めて論じたい。

- 88) 本稿で対象とした時期以前に, 織田家では尾張国内に支城ネットワーク(平城中心)を展開させており, そのプランは, 中心である清洲は縦型だが, その他は基本的に横型(一本街村状)であることが明らかにされている。千田嘉博「尾張国における織豊期城下町網の構造—織田信雄期の支城を中心にして—」(村田修三編『中世城郭研究論集』, 新人物往来社, 1990), 232~283頁。

The Change of the Street Plan of Castle Towns in the Shokuhou Era: From the Tatemachi Style to the Yokomachi Style

NAKANISHI Kazuko

The purpose of this research is to identify the characteristics of the castle towns by examining the street plan (town construction plan) of castle towns in the Shokuhou era. Many castle towns were constructed as capitals of *daimyos* (feudal lords) during this era. The era was a transitional period from the medieval age to the early modern period, and *daimyo* capitals were used during the Tokugawa shogunate from its earliest times. Moreover, these towns have become major cities in the modern age, and continuity from the past is still evident today.

Since the castle towns constructed in the Shokuhou era became superior cities in the present day, they have attracted scholarly interest in various fields and many studies have been accumulated. Especially, the analysis of the street plan in *machiya* district (merchants' and craftsmen' residential district) is important in understanding the spatial structure of the castle town.

Researches on the street plan of castle towns were prosperous in historical geography during the 1980's when Mr. Ashikaga and Mr. Yamori disputed regarding the time of the change of the street plan. However, after their death the discussion was discontinued. The intention of the feudal lord, the designer of the castle town plan, is an important element for considering castle towns.

The author examined the whole plan of the castle town at one time. In the case of castle towns in Nagahama, Osaka Castle in the Tensho era, and Osaka Castle in the Keicho era, which Hideyoshi constructed, the plan was to constitute a hierarchy from castles down to temples and shrines connected by *ote* (castle road). The author defined this model (Castle → *ote* → temples and shrines) as the "Hideyoshi model". In this plan *ote* connected the castle and temples, and *machiya*s (merchants and craftsmen's residential area) were located along this road. The *tatemachi* style plan (vertically-shaped town plan) was derived in this way.

In this research, nationwide town construction plans were studied. It suggests that *daimyos* in the Hideyoshi group adopted the *tatemachi* style plan continuously even after the Battle of Sekigahara, whereas *daimyos* in the Tokugawa group converted the town plan from vertical to horizontal at the time of the battle.

The difference in construction style of castle towns between *daimyos* in the Hideyoshi group and *daimyos* in the Tokugawa group is that the former politically and economically intended to enforce the inward-oriented policy in which *ote* was highly valued. On the other hand, *daimyos* in the Tokugawa group valued highways more than *ote* because they intended to construct a nationwide network of *kaido* under the Tokugawa shogun ate system. Thus, political intention was the biggest factor in bringing such a difference.

Key words: the Shokuhou era, the Plan of Castle Town, the Street Plan, the Battle of Sekigahara